

年間行事

4月	総会	10月	芋煮会
5月	田打祭	11月	飯野八幡宮新嘗祭
5月	御田植祭（会報発行）	11月	研修旅行
8月	注連縄奉製勉強会	1月	農立神事
9月15日	飯野八幡宮八十八膳献饌	2月	飯野八幡宮祈年祭
10月	抜穂祭（会報発行）		



上 三春ネギの種子 下 三春ネギ



夏井川下流の右岸、平北白土のSさん宅では自家採種をして地ネギの「川中子ネギ」を栽培している。作型は「春まき・秋冬どり」で、系統的には「千住一本太ネギ」の合柄（葉の緑色が濃くもなく薄くもない中間）に属する。冬も地上部は枯れない。昔の「いわきネギ」である。

今の「いわきネギ」は昔の「いわきネギ」とは品種が異なる。農協による一括出荷が行われるようになった結果、テカテカして見栄えのいいネギへの切り替えが進んだ。最後に「川中子ネギ」は市場から姿を消す。最後まで頑張っていたSさんが出荷を取りやめると、東京・神田の市場から「宮内庁に納めているので」と出荷を促す連絡が入った。それほど昔の「いわきネギ」（「川中子ネギ」）は味がよかつたということだろう。

一方の上流・夏井川溪谷、小川町上小川字牛小川の集落では「三春ネギ」を栽培している。地ネギだが「川中子ネギ」とは系統が違う。「秋まき・秋どり」は写真は黒い種と、露地で越冬した春先の苗で、冬は地上部が枯れる。「三春ネギ」の名前があるところから、田村郡から種が入ってきたのだろう。甘く軟らかく香りが高い。

「川中子ネギ」と「三春ネギ」

吉田 隆治



八十八膳献穀会 会員募集

奉耕会員 二十九名
 賛助会員 五十四名
 特別会員 五名

飯野八幡宮の古式大祭で行われる八十八膳献饌神事は、古くから連綿と受け継がれてきたもので、県の重要無形民俗文化財に指定されております。

八十八膳献饌神事を永く守り伝えてゆくために、八十八膳献穀会を発足させ、神饌田を設けて、田には餅米を作り畑では野菜等を栽培し、御神饌として奉納しております。

この御奉仕を通じて、日本の伝統的な農耕儀礼の復元と風土に根ざした農業文化を、新しい世代が理解して、更に受け継いでゆくことを願っております。なにとぞ、私共の活動をご理解いただき、多くの皆様がご入会くださいますようお願い申し上げます。

原稿募集のお願い

会報「結」は皆様のご寄稿により形成しています。「結の輪」を広めるべく、ふるってご参加ください。原稿は随時募集しています。内容・形式などは下記宛てにご連絡ください。

結 *yui* No.18

発行日 平成20年10月11日
 発行所 八十八膳献穀会
 〒970-8026
 福島県いわき市平字八幡小路84
 飯野八幡宮 社務所内
 TEL 0246-21-2444
 飯野八幡宮 web
 （「結」既刊分はこちらへ）
<http://www.noteplan.net/8man/>
 発行責任者 飯野 光世

郡山市阿久津町で栽培されている曲がりネギの「阿久津ネギ」が、どうやら「三春ネギ」の親戚らしいことが調べていて分かった。

阿久津は阿武隈川右岸に位置する。昭和三十（一九五五）年の「昭和の大合併」により阿久津の属していた田村郡岩江村は分割・廃村となり、阿久津は郡山市に入った。三春とは地続きである。阿久津を含む、三春方面のネギが「三春ネギ」として名をはせるようになり、夏井川溪谷の集落にまで種が普及した。週末、溪谷で野菜作りをしている私は、そう推測する。

少ない作土を有効に利用して白根の部分を長く伸ばす技術に「やとい」がある。8月に伏せ込み（斜め植え）をすることで白根が長くなり、葉はまっすぐ天に向かって伸びようとするから、全体が湾曲する。曲がりネギといわれるゆえんである。

「阿久津ネギ」と「三春ネギ」は親戚、いやイコールだとしたら、系統的には「加賀群」だ。先日、三春町の「ほろろく焼き」の記事が新聞に載っていた。「三角揚げ」に切れ込みを入れ、地産の曲がりネギ（阿久津ネギ）を詰めてほろろくで焼き、表面に甘めの味噌を塗って食べる。近々「三春ネギ」のルーツ調べの仕上げを兼ねて、「ほろろく焼き」を食べに行こうと思っている。

（よしだ たかはる 編集工房デン）

今年も収穫の季節が廻ってきました。今年の浜通りの作柄概況は「やや良」(102〜105)。(農水省東北農政局八月二十八日公表)となっており、台風などの被害もなく豊作が期待されています。この稔に感謝するお祭りが新嘗祭であり、春の祈年祭と対のお祭りとなっています。

これらの農耕儀礼は他の国にも見られません。欧米では、十月三十一日夜から十一月一日にかけて行われているハロウィーンは、その代表とも言われています。このハロウィーンは、もともとケルト人の収穫感謝祭がカトリックに取り入れられたものとされており、洋の東西を問わず共通のものが見られます。

今、食料の自給率が社会問題となっています。農水省の統計によれば、平成十八年度にはカロリーベースで%となり、っており、年々減少の傾向にあります。諸国の自給率を見るとオーストラリアの23%、カナダの14%、フランスの122%など高い自給率を示しています。

この要因として四大穀物といわれる米、小麦、トウモロコシ、大豆のうち、小麦、トウモロコシ、大豆はほぼ全量を、輸入に頼っていることが大きいといわれています。

しかも最近石油の高騰によりバイオ燃料が普及し、その原料に小麦、トウモロコシ等があらわれ輸入価格が高騰し、それが食品の値上げに影響しているにはご承知のとおりで、あまつさえマネーゲームの標的にすらなっているのです。食物をこのように扱うことは言語道断ですが、経済優先の社会では、如何ともしがたいものがあります。

いのち輝くまじりの誕生 一門馬 巖

日本の大昔を上代じやうだいという。言葉や文字が残されている時代より奈良時代の終わりの延暦十二(七九三)年頃までを示す時代の呼び名である。古代前期から、大和、飛鳥、奈良時代あたりである。

日本列島には旧石器時代から人間が住みつき、永いあいだ狩猟・採集の生活を続けてきた。その後紀元前三世紀に入ると稲作農耕が始まった。やがて弥生時代に入ると各地に「まつり」が誕生し、農耕集団が形成された。古墳時代に入ると、大和の国の統一によってさまざまな「まつりごと」が形成された。

当時の日本人は口承口伝で伝説や神話を語り継ぎ、豊かな食料の確保と子孫の繁栄を自然に願い、太陽と神に祈りを捧げる、美しい「いのちの輝き」を持っていた。こうした自然と一体となった生活の中から生まれた手段が農耕集団生活を保障する「結むす」である。

そもそもの上代の私たちの祖先は、農耕集団を形成して「まつりごと」によって相互扶助の仕組みを考えあげた。集団の共同生活は広くみれば全てお互いの生活を守る助け合いの仕組みということとが考察できる。

古代より農耕集団生活を保障する「結」の役割は、いわば伝統的な人間関係の存在理由でもあった。

上代の農耕集団の生活では、集団と集団の助け合いに還元されてしまい、多くの個人同志の助け合いというものは独り立ちの形式を示さなかった。農耕集団化された中での助け合いの仕組みはいつも集団的であった。



しかしながら、日本の食料のうち%は廃棄されると聞き嘩然としました。なんともつたいないことで、汗水を流し生産した貴重な食べ物を粗末にすることは許されないことであり、このあたりは、道徳教育の啓蒙などが推し進められるべきものと思われれます。

今年台風の上陸が九月までゼロという記録を達したことが新聞報道されました。大変ありがたいことではありますが、これも地球温暖化による異常気象の影響と思うと、喜んでばかりとみえないようです。特に一次産業といわれる農林水産業は気候の影響が大きいです。我が国は八百万の神の国で、日の神を祀る神社は伊勢の神宮、風の神を祀る神社には竜田神社、水の神を祀る神社には貴船社など有名ですが、先人たちは厚い信仰をもって自然災害と向き合い、災いがおこらないようご加護を祈念してまいりました。それは年々歳々祭事を繰り返す、更に信仰を深めていったのであります。

この繰り返し返すことが大切で、ともするとマンネリ化する中で疎かになってしまつことは、厳に慎まなければなりません。一つひとつ確認し洩れのないよう細心の注意が肝要で、私も神職もこのことを心に刻んで神明奉仕に邁進する所存であります。

(しいの みつよ 飯野八幡宮 宮司)

要するに古くからあった結の仕組みは、集団と接するのは集団のみであり、個々の繋がりはなかったのである。

結はその後さまざまな展開を見せた。個人で手が足りない場合には他の集団の手伝いを受け、そこにはある決まった他人と協同する仕方が習わしとして、互いに協力し集団化した「ゆい」となり、労働を共に行う組織としての「きずな」になった。

要するに、集団対集団では個々に繋がりにくかった関係が、集団を超え個人同士の繋がりを持てるような組織となり、より相互扶助の仕組みが個々の生命および生活に身近になっていった。また個人同士の繋がりが複雑化することで、人間関係にも新たなきずなが芽生えることとなったのである。

結論的に伝えられる「結」に関わることについては種類が多く、併在が多いので私的にまとめてみる。「結」と呼ばれる農耕集団は労働の慣習として非常に古く、現代でも広い分布を示している。相互扶助の仕組みを持つ集団の呼び名も、地方ごとにいろいろあるようだ。

個々の仕事を交代しながら共に労働する「結」のほかに、稲作では田植えから収穫、または生活の全般まで、仲間であつてまつり仕事を順次済ませるような共同作業をする、古代からの集団「結」の名残も根強く残っている。

私たちの祖先が基礎を作つた「結」も「まつり」も共に多大な労力や資材が必要であつた。そして長い時間をかけ、助け合い精神とその仕組みが徐々に定められ連綿として受け継がれてきたのである。

「まつり」も「ゆい」も自然の恵みに感謝しつつ奉仕の心を捧げるおこないである。豊葦原瑞穂国であつた遠い上代より、わが日本列島には春夏秋冬によりうつろいと実りがある。自然と渾然一体となり、会員としてのいのちの輝きを実感できることを幸いに思つ。

(もんま いわお・八十八膳献穀会 賛助会員)